

# フランス系カナダ人の歴史と文化

東京大学文学部助教授 西本晃二



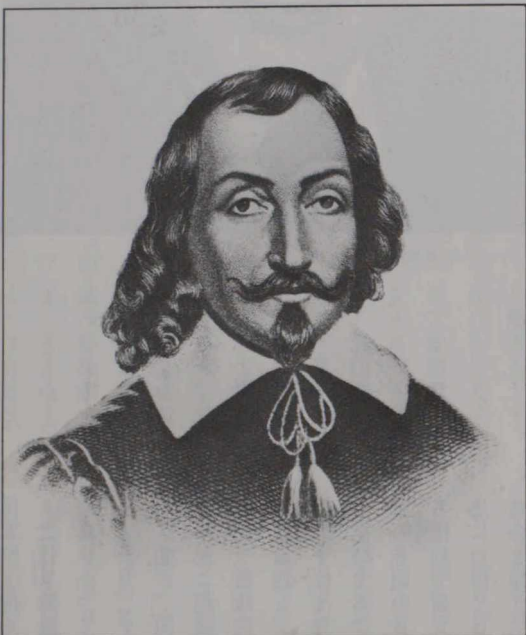
今日のカナダ人を形造るさまざまな人種的要素の中で、フランス系と英

国系が二大勢力をなしているのは周知のことである。そこでそのフランス系カナダ人を定義づける要素は何かと尋ねると、常識的にまずフランス語を話すこと、そして第二にカトリックであること、という答えが返ってくるだろう。ところがこの二点ともに、実はそれほど自明のことではない。

例えばフランス語であるが、なるほど大学教授や、ラジオ、テレビのアンウンサーの話す言葉、モントリオールやケベックで出版される学術書などが書かれていないのは、標準フランス語といつて差支えない。しかしモントリオールの街頭、シクチミ近郊やガスペ半島の農漁村で一般の人々が使っている言葉を聞くと、本国のフランス人達は肩をすくめて「あれはフランス語とはいえないよ」と答える有様だ。この答えは、自分がフランス語を話していると思っただけに、フランス系カナダ人にとっては、実に苛立たしい反応と受けとられるし、同時にカナダにおけるフランス語圏とフランス本国との関係を端的に反映しているといえる。

## ニュー・フランスの設立

そこで、少しく時代をさかのぼってフランス系カナダの歴史を辿ってみることにしたい。ヨーロッパ人によるカナダ発見は、いろいろ前史はあるにしても、本格的な発見ということでは、一五三四、五年の二度にわたる、フランス人ジャック・カルチエの航海が最初のものといつてよい。以後同じカルチエによる一五四一〜三年の第三回航海、一六〇三年に始まるサミュエル・ド・シャンプラン



シャンプラン

な緊迫した情勢ではなかったことにはほぼ間違いない。なにしろ双方とも入植者の絶対数がそう多くなかったから、だいたい植民地行政がきちんと行われていたかどうかも、はなはだ疑わしく、また英仏の他にも、オランダやスペインからの植民もあつたわけで、どこからがフランス領などということよりも、

今の植民活動などが、現在のケベック州からニュー・ブランズウィック、ノヴァ・スコシアにまたがる地域に、新（ヌーヴェル）フランスを出現させることになる。この際移民としてやって来た人々は、多くがフランス西海岸のアルタニユ、ノルマンディ、ガスコニュ地方の農漁民で、この人達が広い新天地に出身地別に分れ住み、場合によっては何世代にもわたって、互いに隔絶したまま生活してきたことが、入植当時十七世紀のブルターニュその他の各地方の方言を、かなり純粹な形で残すという結果を産み、方言学や言語進化の研究の好対象となつているところもある。

一方、この新（ヌーヴェル）フランスに対して、ほぼ同じ時期に、英国が現在のアメリカ合衆国東海岸を占拠して、新（ニュー）イングランドを建設することになるのは周知の事実である。ただし、こういういかにも英仏両勢力が対峙拮抗したように聞こえるが、実際はそ

人々はアメリカ大陸の自然との闘いや、インディアン達との交渉に心を奪われていたというのが実情と考えられる。新フランスにおける、このような開拓者達の生活は、一八六三年に七十六才のフィリップ・オーベール・ド・ガスペが発表した「往時のカナダ人」という小説の中に鮮かに描かれている。

さて、新大陸の状況がこのようなものであったとすれば、植民地の帰属が、現地の実情に即してではなく、むしろ宗主国同士がしのぎを削るヨーロッパ政治の力関係によって決定されることになつたのも、必然のなりゆきといえるかも知れない。ヨーロッパにおいて強大になり過ぎたルイ十四世のフランスに対して、英、独、オランダが連合して戦ったスペイン王位継承戦は、フランスに利のないまま一七一三年のユトレヒト条約をもって終り、新フランスのアカディア地方（現在のニュー・ブランズウィックとノヴァ・スコシア両州に当る）は、英国に割譲される。この時からアカディア人の悲運が始まり、アメリカの詩人ロングフェロウの長詩「エヴァンジェリン」にも歌われた一七五五年の英国軍による一種の根絶し作戦によって、この地方のフランス系社会は一掃されてしまう。

## フランスの新大陸撤退

次いで十八世紀後半に、オーストリアの王位継承問題に端を発して、ヨーロッパ各国を戦いに捲き込んだ七年戦争（一七五六〜六三年）の波紋は、北米大陸における英仏両勢力の衝突をひき起こす。旧大陸での力関係を反映して戦況の振わぬフランス系に対し、政治的にも軍